

二〇一四年 山口県大会上演作品

作品名 『台風一家』

作者名 渚太陽

連絡先 宇部鴻城高等学校

作品紹介

台風接近の夜に恒例の缶詰パーティーの準備をしている野分家。その野分家の長男晴彦は不登校の学生であるが、その台風の夜に選択の決まっている運命の岐路に立つ。

男 3〜4人 女 2〜3人

キャスト

晴彦

父

母

陽子

佐藤

キロちゃん

大型で強い勢力を持ったまま北上を続ける台風一〇号は、昨夜未明奄美大島付近を通過し、現在速度を上げながら本州付近に接近しています。次のニュースです。汚染された土壌から放射線セシウムの除去ができると期待されている植物を植えようと新たなNPO団体が設立されました。現地からのレポートです。現場の…

#台風当夜

台風に備えて、準備している

母 缶詰と懐中電灯と……あ、乾電池、乾電池。お父さ

ん、窓は、きちんと打ち付けました？

父 ああ、打ち付けたよ。

母 頼みますよ、去年はサッシから雨が漏れたんですか  
ら。

父 わかっているって。大体、あれは、お前がベランダの  
ゴミを雨樋に流して詰まったから……

母 何か？

父 ああ、何でもないよ（笑）あと、晴彦の部屋はでき  
なかつたぞ。

母 そう……でも、あそこも風向きが悪かったら、危な  
いのよね。もう一度行ってみてもらえますか？

父 でも……

母 お願いします。

父 ……わかつたよ。

父去る

陽子 帰ってくる

陽子 ただいまー、わーソファとかも片付けたんだ。

母 おかえり、そうよ。避難所みたいでしょ。

陽子 うんうん。へー随分そろえたね。

母 ねえ、これ運んでよ。

陽子 ああうん。どうしたのこの長机？

母 公民館から借りて来たのよ。

陽子 へー、本格的。

母 外、もう雨降ってた？

陽子 少しね。あれ、お父さんは？今日は、仕事休むって  
言ってたよね。

母 （上にいると示す）

陽子 ああ。お兄ちゃんか……そうだ、これ学校の先生が、  
お知らせだったよ。

母 ん？ああ、台風のね。

陽子 先生も心配してたよ。お兄ちゃんのこと。まあ、時<sup>2</sup>  
間が解決すると思いますって答えていた。

父、扉越しに晴彦に話しかけているシルエット

母 晴彦もどうしたもんかね……もうすぐ夏休みだつて

のに……

陽子 もう、三ヶ月か……まあ、お兄ちゃんの場合は一年  
中夏休みか？いや、このままいくと一生夏休みってこ

とになつて働かなくていいかもね？

母 馬鹿言ってるんじゃないわよ。あーあ、晴彦にあんた

の明るさが少しでもあったらねえ。

陽子 お兄ちゃんは、考えすぎなんだよ。なんか、まじめ  
つていうか…まあ、でもこういうときは周りが元氣  
出しておかないとね。お母さんも分かった？

母 分かっているけどね…やつぱりね。

陽子 一番辛いのは、お兄ちゃん自身なんだからさ。

父、降りてくる

父 お、陽子お帰り。早かったなあ。部活は？

陽子 だいま、うん。台風接近中だから一斉下校。

父 なるほど。

陽子 お兄ちゃんは？

父 (首を振る)

陽子 まあ、そうだよな。でも、もしかしたら今日あたり、

一緒にごはん食べたりにして。

父 何で？

陽子 だって、お兄ちゃんも私も、つていうか我が家つて  
さ台風が近づくと妙にテンション上がってさ、缶詰パ  
ーティーやるじゃない。

母 パーティーってそんな不謹慎なこと言うもんじゃ  
ありませんよ…あれは、小さい頃停電で「真っ暗だ。

暖かいものが食べたいよ。」つてあんたと晴彦が泣く

もんだから、「じゃあ、今日は好きな缶詰開けていい  
よ。今日は缶詰パーティーよ！」つてごまかしただけ  
なんだけどもね。何だか、いつの間にか恒例行事になっ  
ちゃって…

陽子 でもでもだからね、お兄ちゃんもさ。

父 そうだといけどな。

母 あ、そうだったロウソクも準備しておかなくちゃ。

玄関から声

利夫 ごめんください。

母 あら、だれかしら。

陽子 ゲ、あの声は！

父 お、来た来た。

母 陽子、ちよつと見てきてよ。

陽子 えっ。

母 あ、そうだ。ロウソクロウソク。

父 母さん、ついでにロープも持ってきてくれないか？

母 はいはい。

陽子 えっ、ねえ。ちよつとお母さん。

父 ああ、そうだ軍手を用意しなくちゃな。

母、父去る

佐藤 ハイテンションで入ってくる

佐藤 いやー、誰も出てこないのので勝手に入ってきました。どうもみなさん。いやー、台風接近で大変ですね。町中いろんなものが飛ばされないようにしてあります。

陽子 何で勝手に入ってくるのよ。

佐藤 勝手知ったる、ご近所じゃないですか。

陽子 それに、その妙なハイテンションは何なのよ。

佐藤 いや、昔から何だか台風が近づくと、こうテンションが上がっちゃうって。

陽子 え、あんたも？

佐藤 てことは、陽子さんですか？いや、やっぱり気が合いますね。ははは。

陽子 はいはい。やだ、びしょ濡れじゃない。

佐藤 いや、傘あんまり意味なかったですよ。この風だと。

陽子 で、何か用？

佐藤 うん、お父さんからメールもらって。

陽子 お父さんから？メール？

父、軍手持って登場

佐藤 お父さんどうも？

父 よお、よく来たね調味料君。

佐藤 お父さん。その呼び方、やめてって言ったじゃないですか。

父 いいじゃないか。

陽子 何で、「調味料」？

父 だってさ、「さとうとしお」…なっ（陽子に同意を求めろ）

陽子 なるほど…今まで気づかなかった。

佐藤 まあ、ははは…

母 （ロウソクとロープを持って）いらっしやい。佐藤君。

佐藤 あ、お母さん、お邪魔します。（ロウソクとロープに気付く）それは…

母 あ、あははは、あ、はいお父さんロープ。

佐藤 ？

父 なかなかないよなあ一人で「甘い」も「辛い」もあわせ持った名前ってのは。

母 あんまりからかつちや可哀そうよ。

父 いいじゃないか。こう見えて父さんは佐藤君のこと

気に入ってるんだから。そうじゃなきゃ、わざわざ娘の彼氏にメールなんかしないだろ。

陽子 何言ってるのお父さん。彼氏だなんて、ただの幼なじみだし、やめてよね。

父 ははは。

佐藤 えっ、僕、そんなに気に入ってもらえてたんですね。わかりました。陽子さんの事は僕に任せてください。

父 ああ、頼んだよ（笑）

陽子 ああ頼んだよって、何言ってるのお父さん！

佐藤 照れなくてもいいじゃないですか。

陽子 照れてません！

佐藤 それより、お父さん、用ってなんですか？

父 ああ、そうそう。裏の庭木がさ、折れないようにこの

のロープで縛るのを手伝ってもらおうと思ってるさ。

佐藤 そんなことぐらい、いつでも言ってるさ。

父 助かるよ。よし、じゃあ、お願いするか。母さん、

シユガー&ソルト君にカツパ貸してやって（笑）

佐藤 もう、お父さん。英語でもダメですよ。冗談きつい

なあ。

父 ははは、ほら早く行こう。

母 気を付けて下さいね。

佐藤 ところでお父さん。陽子さんとは、どうすれば付き

合えますかね？先日もフラれたばかりなんです。

父 毎週フラれてないか君は。

佐藤 あれ、お父さん本当冗談きついなあ。

父 ははは（笑）

父、佐藤去る

母 本当、面白い子ね。

陽子 おもしろい？どこが。あ、そうだ。ねえ、お母さん。

ほら、人生ゲームどこにしまったっけ？

母 人生ゲーム？ああ、階段下のクローゼット見てみて

よ。

陽子 （人生ゲームを手にして）あつた、あつた。これが

なきや台風の夜は、盛り上がりませぬね。

母 去年の今頃は、晴彦も一緒に出来ただけどね…

雨の音

陽子 ほらほら、また暗い顔してる。笑顔、笑顔。みんな

でお兄ちゃんの辛いこと笑い飛ばそうって決めたで

しょ。

母 そうでした。

陽子 はい、口角上げて。

母 はいはい。

陽子 それでよろしい。

母 ところで利夫君って、明るくていい子だね。本当に

陽子の彼氏ならいいのね。どう、この際付き合う？

陽子 何言ってるの。やめてよお母さんまで。

母 あら、赤くなってるない？

陽子 えっ？

母 うそよ。

陽子 もう、お母さん。

晴彦のシルエット

音楽

暗転

雨の音強くなる

佐藤 いや、風がだいぶ強くなってきましたね。

父 陽子、タオル持ってきてくれ。

陽子 はい。

父 それから、母さん、風呂は沸いてるのか？停電になる前に沸かしとかなないと大変だぞ。

母 大丈夫ですよ。今、晴彦が入ってます。もうすぐ上

がるんじゃないかしら。

父 ああ、わかった。

陽子 はい、タオル。

父 ありがとう。

晴彦、風呂から上がってくる

佐藤 あれ、お兄さん？どうも利夫です。

晴彦 ……(無言で会釈)

晴彦去る

佐藤 なあ、お兄さんって、まだ…

陽子 そう、お風呂の時だけは黙って部屋から出てくるの。

佐藤 へえ、そう…、学年一位で秀才だったのに…

陽子 ……。

父 ほら、じゃあ利夫君も先に風呂に入ったら。

陽子 は？

佐藤 ああ、お父さんからどうぞ。

母 いいのよ、お父さんはごはんの後に入るから…ごはんって言うっても、缶詰だけだね。ふふふ。

佐藤 そうですか。じゃあ、お言葉に甘えさせてもらって

お風呂お先にいただきます。

父 ああ、ゆつくり入っておいで。

陽子 ちよつと、ちよつとなに？どういふこと？

母 あれ、言つてなかつたわけ？利夫君は今日家に泊まるのよ。

陽子 えーっ？何で？

母 利夫君のお父さん、市の土木課でしょ。今日は台風接近で夜勤みたいなのよ。だからね。

陽子 だからねって。何で、同級生の男の子が普通に泊まるのを許してくれつちやつてんのよ。

父 小さい頃は、よく泊まりに来たじゃないか。

陽子 もう、私も年ごろの中学生です！

父 自分から年ごろって（笑）

陽子 なんて親なのまったく。

母 いいじゃないの。利夫君は、お父さんしかいないんだから。こんな夜は協力してあげなくちゃ。

陽子 信じられない。

佐藤 お母さん、この縁側の洗濯物たたんでおきましょうか？

母 あら、気が利くわね。じゃあお願いね。

陽子 洗濯？だめー！こらー見るなー！（走って追いかける）

父 そうぞうしいな、まったく。

陽子 （洗濯物を抱えて）油断も隙もあつたもんじやないわ。危うく私の下着が盗まれるところだった。

母 そんなことしませんよ。利夫君は。

父 何、ぴりぴりしてるんだ陽子は。

陽子 あのね、いつまでも子供じゃないんだからね。

母 何なら、布団も並べて敷いておきましようか？昔みたいに。

陽子 お母さん！

雷鳴

停電

風の音

真つ暗な中

陽子 えっ？

父 おお、停電か。

母 あら？でも、お隣はついてるみたいですよ。

佐藤 大丈夫ですか？みなさん！

陽子 お母さん？懐中電灯は？

母 その辺にない？

佐藤 僕が探します。

母 お父さん、ブレーカーを見てきて下さい。  
父 おお、わかった。  
陽子 きゃ、ちよつと誰よおしりに触ったの。  
佐藤 ぼくじゃありません。  
母 ごめんなさい、暗くて見えないから。  
陽子 もう、お父さん早く。  
父 よし、上げるぞ。

明るくなる

安堵する家族

陽子 あ、やつと着いた。  
母 ブレーカーが落ちただけだったのね。  
佐藤 よかったですね。  
陽子 きゃー！ちよつと、あんたなんて格好してるのよ。  
母 あら？  
佐藤 (パンツ一丁の利夫) ……いやん  
陽子 いやんじゃないわよ！  
佐藤 いや、今から風呂に入ろうかと思ってたら、停電だったの…  
陽子 何か履きなさいよ！  
佐藤 ああ、ハイ。

父 おかしいなあ、何でブレーカーが落ちたんだ？  
母 変ですね…

階段下で立っていた晴彦の前に怪しい人物  
無言で見合う二人  
風の音が強くなる

キロ ちよつと待って。  
晴彦 ……えっ？  
キロ やあ、ボクの名前は、キロ。  
晴彦 ……(目をこする)  
キロ キロちゃんがいいよ。  
晴彦 ……何だお前は？  
キロ 私は、人生の分岐点、つまり「岐路」に現れる案内人。  
晴彦 キロ？  
キロ 人生には、たくさんの「岐路」つまり選択がある。  
右と左、前と後ろ、白か黒かはたまた赤か、学校に行くのか行かないのか？  
晴彦 ……  
キロ 何を選ぶかによってあなた自身の人生は大きく異なることがある。

晴彦 ……

キロ とまあ、普通は、ここであなた自身に選択権が有り、岐路でどちらの道を選ぶのも自由だけど、今回だけは選択権がないレアケース。

晴彦 選択権がない？

キロ 元はといえば、プロメテウス様のきまぐれで人類に「知恵」を与えるからいけないんだけど…

晴彦 ……？

キロ ごめんごめん、とにかく今から三つの岐路が、君の目の前に現れる。その時にどうしてもこちらの指示通りに道を選んでもらう必要がある。

晴彦 お前の指示通り？

キロ そういうこと。

晴彦 どうして？

キロ どうしてって…まずい、もう最初のキロだ。

晴彦 最初の？

キロ とにかく最初のキロ。さあ、「今から君は部屋に戻る」それとも「戻らない」どちらを選ぶ？

晴彦 何言ってるんだ戻るに決まってるじゃないか。

キロ 答えは、「戻らない」だ。

晴彦 なんで？

キロ 言っただろ、今回はレアケース。イレギュラー。選

択先はあらかじめ決まってる。

晴彦 ……どけよ、オレは部屋に戻るんだ。

キロ そういうわけにはいかない。

晴彦 どけよ。

キロ もうすぐわかる。

窓ガラスの割れる音

母 何？

父 何だ？

陽子 お兄ちゃんの部屋からだ！

駆け寄る家族

父 大丈夫か、晴彦？

母 大丈夫？

佐藤 うわー、お父さん窓ガラスが割れちゃってます。

陽子 隣のベランダから、鉢が飛んできたんだ。お兄ちゃん

んいたら大けがだったよきつと。

母 だから、雨戸締めてちゃんとしてって言ったでしょ。

お父さん。

父 そんなこといったって、部屋はしまってたし…

佐藤 まあ、ケガがなくてよかったじゃないですか

母 まあ、そうね。

父 ほら、ケガをするから離れてなさい。晴彦は、あつちについてなさい。

陽子 私、ぞうきん持つてくる。

佐藤 お父さん手伝います。

父 かあさん、新聞紙とビーニール袋。

母 はい。

父 利夫君、何か窓ふさぐもの持つてきて。

佐藤 たしかさっきの倉庫にベニヤ板ありましたよ。

父 それだ。

窓の片付けなどをしている家族

晴彦 …お前の姿は、みんなには見えないのか？

キロ そりゃそうよ。そうそう見えてたまるもんです

か。…少しは、信じる？

晴彦 これが、「部屋に戻らない」答え…

キロ そう、これが最初の。キロ

晴彦 僕がケガをしないことがか？

キロ そう、これはあなた自身のキロでもあるけど、人類

のキロでもあるの。

晴彦 人類の？

キロ アインシュタインだって、あの時ムリヤリでもあつちの道を選ばせておけば、あんな訳の分からない爆弾

を生む原因にはならなかったんだ。ただ、まああれはまだ取り返せる想定内の分かれ道。でも、今回は絶対だ。人類の運命がかかっている。

晴彦 なんて、僕がケガをすることと人類の運命が関係するんだ。

キロ それは、君がケガをするとケガをしたのは、窓を打ち付けなかったお父さんが原因でことになり、お父さんが悩み、お母さんが心配して…みんなの負のスパイラルが…って上手く説明できないけどそういうものなんだ。どうも、この野分家は、人類のキロと大きく関係していることは間違いないんだ。

晴彦 信じられないね。

キロ もし、一つの花の命が、この地球の運命とつながつ

てるとしたら、君は信じる？

晴彦 花と地球？

キロ まあ、信じようと信じまいと、これは運命。そして

今回は絶対。例外はない。

晴彦 そんな…

みんな、がやがや降りてくる

父　　なんとか塞いだな。

佐藤　僕、ガラス捨ててきます。

陽子　お兄ちゃん、部屋びしょ濡れだよ。今日は、もう部屋に戻れないね。

母　　そうね、台風だし、今日はみんなでリビングで寝ましょうよ。

父　　そうだな、そうしよう。

佐藤　僕もいいんですか？

陽子　あんたは、台所ね。

佐藤　そんな。

母　　ふふふ

陽子　じゃあ、お兄ちゃんも一緒に缶詰パーティー出来るね。

晴彦　…なあ、これもキロなのか？

キロ　ううん。どうするかは、あなたの自由。次のキロは指示する。

陽子　ねえ、いいでしょ、お兄ちゃん。ねえったら。

晴彦　まあ、いいか…

陽子　やったー。じゃあ、ごはんの後はみんなで人生ゲームよ。

父　　よーし、やるか。景気づけに母さん酒をつけてくれ。

母　　だーめ、今日は火を使わないんだから。

父　　そうか、じゃあビール！

母　　一本だけですよ。

陽子　わーいわーい。今日は家族水入らずだね。

佐藤　ねえねえ、家族水入らずってことは、やっぱり陽子さんも僕のこと家族と認めてくれてたんですね。

陽子　あ、あんたいたんだ。忘れてた。

佐藤　冗談きついなあ〜

母　　さあさあ、食べましょ。缶詰だけど。

父　　晴彦も飲むか、ははは。

母　　だめですよ、お父さん。

笑い声

雨風の音

台風情報が流れる

暗転

人生ゲームをしている家族

佐藤　よーし、6だ！1，2…おし、子供が生まれたお

祝い金千ドルをみんなからもらう！

父 利夫君も子供好きか？

佐藤 はい好きです。僕は、陽子さんと結婚したら子ども  
たくさん育てたいと思います。

陽子 何、勝手に私と結婚する体で、話し進めてるのよ。  
父 頼もしいなあ。

母 この子は私に似て、安産型だから大丈夫よ。

佐藤 はい、じゃあ、僕頑張ります。

父 ばんばん頑張れ！

陽子 こら、あんたらセクハラで訴えるわよ！

佐藤 冗談ですよ、陽子さん。

父 ははは（陽子のおしりを叩く）

陽子 こら、おしりを叩くな！

母 ふふふ

陽子 もう、お兄ちゃんも何か言ってよ。

晴彦 ……

キロ 外の台風にも負けず、にぎやかな家族だな。

晴彦 ……

キロ じゃあ、ちよつと席をはずよ、持ってくるものがあるから。

陽子 ほら、次はお兄ちゃんの番よ。

晴彦 ……

キロ ゲームを楽しんで……まだキロじゃないから。

佐藤 お兄さん、ルーレットを回して下さい。

キロ じゃあ、あとで……

晴彦 ……

キロ去る

佐藤 お兄さん？

陽子 お兄ちゃん大丈夫？さつきからブーツとして……

晴彦 ああ、うん。

佐藤 どうぞ、お兄さんの番です。

晴彦 ……：回すよ。

佐藤 あ、3ですね……あ、分かれ道です。就職コースか

大学コースかを選んでください。お兄さんはどっちか

なあ。

陽子 お兄ちゃんはどうちかかっていうと進学かな？

母 どっちにする？お母さんもお兄ちゃんは……

晴彦 ……：じゃあ、就職で。

佐藤 お、意外ですね！就職ですか。

父 そうか、晴彦は就職を考えてるのかくなるほど。

晴彦 ……

母 そうだったのね、お母さんはてっきり進学かと思っ

てたわ。

陽子 でも、お兄ちゃんが就職つてのもありだと思っ

母 そうね。じゃあ、何がいかしらねえ。

佐藤 何か専門職がいいですかね。

陽子 いや、事務職が似合うんじゃない。

母 そうかしら、お母さんは…

父 おいおい、そんなのは晴彦が決めることで周りごと

やかく言うもんじゃ…

晴彦 うるさいな！ただのゲームだろ。

陽子 何よ、怒ることないでしょ。

母 ごめんなさい。ゲームなのにほらみんながねえ…

佐藤 すいません。お兄さん。

陽子 ただ、ワイワイ言っただけなのに。お兄ちゃんも

もっと楽しめばいいでしょ。昔みたいに。

父 ほら、あれだ。久しぶりにこうやって晴彦とゲーム

とか、会話することなかったから、ついみんながさ…

テンション上がって…すまん…晴彦。

母 ……別に怒ってないよ。

母 ごめんなさいね。

陽子 そう、だったらもつと笑顔でいてよね、お兄ちゃん。

晴彦 ……

佐藤 そ、そうですね。みんな明るく楽しくいきましょ  
う！台風だけに気分アゲアゲの高気圧で。

陽子 あのね、台風は低気圧です。

佐藤 あ、そうだっけあはは…

晴彦 ……次、いこうよ。

父 じゃあ、お父さんだな。ほれ、…えーと1, 2…

よし。やったー！「宝くじが当たって百万ドル貰え

る」だつてさ。

佐藤 ああ、いいなあ。

父 へへへ、いいだろう。

陽子 はい、百万ドル。

母 本当に当たったら、もつといいですけどね。お父さ

ん、お給料少ないんですから。

父 それを言うなよ。

母 だって、家も随分古くなってきたし、そろそろリフ

ォームしたいわねえ。

陽子 あ、雨漏り！

母 えっ？どこ？

佐藤 ああ、あそこです。

父 ほんとうだ、こつちも漏ってる。

母 はい、お父さんバケツ。

父 ああ、うん。

佐藤 ちようど、お兄さんの部屋の窓から浸みてきてるん  
です。

陽子 きつと、そうね。

母 ほら、やっぱり、リフォーム必要でしょ。

父 わかったわかった。さあ、次は誰の番かな

母 もう、話を誤魔化して。

佐藤 次は、陽子さんです。

陽子 私か、よーし：それ！えーと1、2：あーっ！し

まった：

佐藤 どうしたの？

陽子 変な所に止まっちゃった：

佐藤 本当だ、紙が貼つてある。

父母 はい！くじ引きチャンス！

佐藤 何なに？

陽子 我が野分家独自の人生ゲームルール。何カ所かに

「くじ」って紙が貼つてあるでしょ。そこに止まった

ら箱からくじを引くのよ。

佐藤 何か当たるの？

陽子 箱の中に紙が入ってて、それが：告白っていうか、

自分のことをいろいろ話さなきゃいけないのよ。

佐藤 おもしろそうだね。

父 だろう、家族でなかなか自分のことを話す機会がな

いなあって思った時に、お父さんが考えたんだ。

陽子 おおしろいけど、中には話したくないものとかある

のよ。

佐藤 たとえば？

陽子 「初恋の人の名前」とか、「恥ずかしかった話し」

とか：

母 さあさあ。

父母 何が出るかな、何が出るかな。

佐藤 パスとか出来るの？

父母 ブブー、例外はありません。

佐藤 おお、じゃあ、ぼくもそこに止まって声高らかに「初

恋の人」の名前を叫びたいなあ：陽子さーん！

陽子 もう、うるさいなあ。はい、これ。（紙を引いて母

に渡す）

母 はい、出ました。「勘違いした話し」略して：

父 カンばな！

陽子 よかった、軽いやつで。

父母 さあ、話して話して。

陽子 そうだなあ：勘違いかあ：ええと、台風か：そ

うだ私、小さい頃「台風一過」を「台風一家」って勘

違いしてた。過ぎるじゃなくて、ファミリーの方。

佐藤 台風一家ねえ：どんな家族だろう？

陽子 私、うちみたいにワーワーうるさい家族を台風一家

っていうんだと思ってた。

佐藤 なるほど。ありそうな勘違いだね。

陽子 あと、「波浪注意報」も「英語のハロー注意報」だ  
と思つてた時があつて、「ああ今日は、英語で挨拶し  
ちゃあダメなんだ」なんて勘違いしてた。

父 そういうこと、あるよなあ…お父さんも「巨人の  
星」つていう野球漫画のオープニングの時に「おもい  
こんだら」つて歌があつてさ、その時に主人公が重  
そうなローラーを引いててさ、小さい頃そういうロー  
ラーのこと「こんだら」つて言つてたよ。

佐藤 ああ、「思い込んだら」つて「思い込んでいるなら  
ば」なのに「重たいこんだら」になつちやたんですね。

母 ははは、そんな、ばかみたいな、勘違いある？

陽子 誰だつて、勘違いぐらいあるわよ。

母 私は、あんまりないなあ。

父 そんなことないだろう。母さんだつてATMのこと  
ずっとアトムつて言つてただろう。

母 そんなこと言つてませんよ。

陽子 アトムつて(笑)

佐藤 強そうですね(笑)

父 言つてたよ。「アトムどこにある？」つて言われて  
最初びつくりしたもの。

陽子 どんな現金引き出す気かしらね。

佐藤 「初めてのアトム♪」

父 上手い。座布団一枚

佐藤 ははは。

母 さ、次は私の番ね〜ルーレット、ルーレット。

父 ああ、母さんだつて誤魔化した(笑)

晴彦 ……ふっ

陽子 あれ、お兄ちゃん今笑つたでしょ。

晴彦 笑つてないよ。

陽子 笑つたよ、今。

父 母さん、晴彦に笑われてるぞ。

母 もう、みんなして笑つて。

佐藤 ははは

母 さあ回すわよ。えーと…7ね。1、2、3…げ、

陽子 しまった。

佐藤 おーつと！

父 これは！

陽子 くじ引きチャレンス。

佐藤 さあ、引いてももらいましょう。

母 何が出るかな、何が出るかな〜

陽子 はい、これ。

父 おおつとこれは、ついに出了ました。

父 なんだ？

佐藤 何々？

母 ちよつと、早く教えてよ。ドキドキするじゃない。

陽子 いつ出るかいつ出るかと思つてましたが、この台風のさなかやつと出ました。「恋の話」略して…

みんな おお、コイバナ！

佐藤 お母さんの恋の話ですか？

陽子 ここは、やつぱりお父さんとの馴れ初めを聞きたいですね。

母 ええ？お父さんとの？

父 おいおい、父さんとの話だなんて、こつちまで恥ずかしくなるじゃないか。

佐藤 でも、他の人との恋の話聞くのは、嫌ですよ〜

父 確かに。

母 恥ずかしいなあ…

みんな 例外はありません。

佐藤 お母さんとお父さんラブラブだから、きつと素敵なお出会いだつたんでしょね。

父 こらこら、勝手に話のハードルを上げるなよ。

陽子 早く、早く。

母 もう、仕方ないな。じゃあ話すわ。

陽子 待つてました！

母 ああ、お母さんが、学生の頃ね。何だつたかなあ、

男の子と女の子が何人か集まつてね、おしゃべりしてたのよ。そこでそう、怖い話が上手な人がいたのよ。

陽子 怖いって、お化けとかの？

母 そう。

佐藤 クラスに一人はいますよね、そういう奴。

母 その人がもう、女の子をこわがらせてね、みんな、キヤーキヤー言つて騒いでて…まあ、面白おかしく盛り上がったのよ。でもね帰るときになったら、あたりも暗くなつてきたから、何となく怖いなあなんて雰囲気になつてね、男の子が女の子を送っていくことになつたの。そこで、お父さんがお母さんを送つていくことになつてね…

## 回想

学生服姿の二人

母 バイバイ〜

父 またな。

母 じゃあ、みんな気を付けてね

父 そつち、ちゃんと送つて行つてな。

母 ……

父 ……

母 ……じゃあ、私も帰るわ。

父 あ、あの僕が送っていくよ。

母 え？いいわよ。

父 送っていくよ。

母 ほら、野分君、方向違うでしょ。

父 違ってもいいから、送って行く。

母 いいよ、私は、そんなに怖くなかったし。

父 でも、暗くなってきたし、それに…

母 それに…？

父 女の子なんだから男が守ってあげないと。（と言っ

て手を握る）

母 え？

父 あ、ご、ごめん。（手を離す）

母 野分君…

音楽

「遠回りの帰り道」

あなたはいつも笑って

みんなを見守るようにいたわ

私は、そんなあなたに気づかず

恋に恋していたの

二人で歩く帰り道

あなたは、分かれ道で遠回り

これから道に迷っても

僕が君を守っていくよ

この先の岐路に立っても

手と手をつないでいこう

同じ道ずっと一緒にね

My Love

Your Love

Forever

母

お父さんね、分かれ道でね、わざわざ遠回りしてくれて、家の前まで送ってくれたの。お父さんの家、全然反対方向だったのにさ。いいよ、いいよって笑顔でね。うれしかったなあ、あの時は…

陽子

へー、やるじゃん、お父さん。よせよ、照れるじゃないか。

父

いいなあ、お父さんとお母さん、ラブラブな感じで、うらやましいなあ…それから結婚されて、ずっと仲

良しですか？いいなあ…

母 そうでもないけどね。いろいろあるわよ。夫婦生活

なんて…ねえ、お父さん。

父 ま、まあな。

晴彦 そんなことあったんだ…

佐藤 よーし。ぼ、僕も陽子さんを守っていきますので、

よろしくお願いします。

陽子 別に、あんたに守ってもらわなくてもいいです。

佐藤 いいじゃないですか、陽子さん。お願いしますよ。

陽子 それに、「あんたに」じゃなくて「あんたから」身

を守る方法の方が大事な気がするわ。

晴彦 たしかに。

佐藤 ちよつと、お兄さんまで。

父 上手いこと言うな

佐藤 そんな

みんな ははは…

### 騒ぐ家族

キロ現れる

手にはなにやら鞆をさげている

キロ 随分、にぎやかだね。

晴彦 あ、…それは？

キロ あとでわかるよ。

晴彦 ふーん。

キロ そろそろ、次のキロだからな。

晴彦 そうか…

母 ほらほら、馬鹿なことばかり言っていないで次に進

めましょう。

父 次は、利夫君だ。

佐藤 ああ、はい。では、…5です。1、2…って、し

まったあ…

陽子 えーと何々…株に投資して1万ドル損しただって。

佐藤 げげーマジか。

陽子 はい、銀行にお金返して下さいよ。

佐藤 とほほ…って、お金が足りないよ。

父 利夫君、何なら僕が貸そうか？

佐藤 お願いします。宝くじの当たった億万長者様

じゃあ、きつちり返してくれよ。

佐藤 ははー(頭を下げる)

みんな ははははは

母 は、次は晴彦よ。

晴彦 あ、うん。(ルーレットを回す)

母 8ね…1、2…はい、出ました！晴彦にもくじ引

きチャンス！

みんな おおー！

陽子 さあ、お兄ちゃんくじを引いてね。

父 何が出るかな？何が出るかな？

晴彦 ……

陽子 はい、出ました…って…こ、これは…

父 何が出た？見せてみる。

陽子、父に紙を見せる

父 母さん、これ…

母、紙を見る

母 あ、あれね…こんなの入ってましたっけ？

父 (誤魔化すように) あれれ、何かの間違いじゃ…

佐藤 何だったんですか？見せて下さいよ。

父 いや、これは、違う紙だ。よし、もう一回引こう。

母 そうね、そうしましょう。

佐藤 やだなあ、例外はないって言ってたじゃないですか。

見せて下さいよ。

父 いや、ちよつと…

佐藤、父から紙を取ろうとする

父、紙を渡さないようにするが、キロがその紙をとって

晴彦の前に、落とす

父 あっ…

父、不思議そうに手を見つめる

晴彦、紙を拾う

晴彦 ……

佐藤 お兄さん、見せて下さいよ。

佐藤、紙を取って

陽子 ちよつと！

佐藤 ええと「辛かった話し」略してらばな！

陽子 ばか…

佐藤 えっ？なに？

晴彦 ……辛かった…？

母 ……いいのよ、晴彦。ただのゲームだし、言えな

ったら、言わなくても…

キロ そう、これが二つ目のキロ。

晴彦 ……ぼ、僕の…

佐藤 あれ？なんかまじったかな…

キロ ここで、君は辛かった告白を思うまま、家族に言う

こと。それが選ぶべき道。

陽子 そうよ、お兄ちゃん。

晴彦 ……つ、つらかった…

キロ 例外はない。

父 晴彦？

キロ 我慢している思いを…辛かった気持ちを家族に伝

える。選択権のない道。

晴彦 はあ、はあ…

陽子 お兄ちゃん？

母 晴彦…

父 晴彦！

晴彦 わ—————

### 回想

母 何よ、いつも仕事仕事って言って、もっと家庭のこ

とを考えてよ。

父 子どものことは、任せたって言っただろう！

母 そういう勝手な押しつけを…

父 だいたい、無理してあんな進学校に入れることなん

かなかったんだ。

母 今更そんなこと言わないでよ。あなただって進学に

は…

父 晴彦。

晴彦 何で、ケンカしてるの…？

母 違うのよ、晴彦。お父さんとお母さんはね、ただ話

しをしてただけなのよ。

晴彦 僕のせいで、あんなに明るかった二人がケンカして

るの？

父 違うんだ晴彦。

晴彦 僕の成績が悪いから？僕が駄目だから？僕が期待

に応えられなかったから？

陽子 どうしたの、こんな夜に…

母 陽子。

晴彦 僕の努力不足？僕もっと頑張らなきゃいけない？

陽子 お兄ちゃん…

晴彦 僕が…駄目なんだ…

父 うるさい！

母 大きな声を出さないでよ。

父 大体、お前が晴彦を甘やかせすぎなんだよ。

陽子 お父さん、お兄ちゃんの様子が…

父 晴彦！

母 晴彦！

晴彦 ごめんね…駄目だよ…ごめんね…

回想シーン終わり

頭を押さえてうづくまる晴彦

辛かったことを告白している

母 …ちがうのよ、晴彦。たしかに、晴彦のことで

りびりしていたこともあったわ…でもそれは、受験  
を控えていたあなたのことを思っていることなの。

晴彦 ……

父 お父さんたちがああいう状態だったことで、お前を

苦しめたことは、謝るよ。

陽子 そうよ、お兄ちゃんのせいじゃないって。

晴彦 だって…だって…

父 ……もしかしたら、ケンカばかりになったきつ

けに晴彦がなったかもしれない…だから、今度は、

お父さんたちが、晴彦を、笑顔にするきっかけにな

うって…

母 笑顔でいれるようにしようって…

晴彦 気持ち悪いんだよ！いつも、ニコニコしてさ…

わかってるよ僕だって…、でも、そうやって心配さ  
れて…不安にさせると思っただけで…痛いんだ

ここが(胸)…苦しんだよ…よくわかんないんだ…

学校行かなくちゃって思うし、でも…よくわかん

いんだ…頭も痛くなってくるし…だから、無理矢理

笑うなよ…馬鹿みたいじゃないか…

父 晴彦…聞いてくれ。お父さんとお母さんと陽子は

決めたんだ。馬鹿みたいでもいい。家族がわいわい

やがや馬鹿みたいに笑いあえた方が…笑顔でいた方

がいいって……したら何か変わるんじゃないか

って……そういう一生懸命なことって伝わるんじゃない

かってそう信じたんだ。

母 ……だって、いつまでも不安になって泣いてられ

いでしよう……本当に泣きたくて叫びたいのは、晴彦

自身なんだから。

晴彦 ………母さん

父 学校だけがすべてじゃないんだ……行きたくな

たら行かなくなつていい。勉強が嫌いなら、違うこと

で頑張ればいい……だから部屋にこもって、逃げない

で……また、一緒に笑おう。

晴彦 ………父さん

陽子 一番辛いのは、お兄ちゃんなんだって、私たちみんな知ってるよ。

母 ゆっくり、ゆっくりでいいの……

陽子 また、元気なお兄ちゃんになってね。

晴彦 ……：陽子

キロ (拍手) ……：美しいね。親は子を思い、子は親を思う……いつの時代も変わらない……愛情つてやつだね……

晴彦 ……：

キロ このキロでの君の心の告白という選択によって、負のスパイラルは少し解消される。

晴彦 ……：そうか……

キロ そして……

サイレンが鳴る

雨音が強くなる

陽子 あれ、サイレンだ。

母 何のサイレンかしら？

佐藤 何かの警報ですかね？雨も強くなって来ましたね。

父 そうだな……かなり風も吹いてるな。陽子、ラジオ

あつただろう。ちょっと、つけてみてくれ。

陽子 あ、ううん。ええと……

佐藤 あれ、メールだ。

陽子 誰から？

佐藤 ちょっと待って。親父からだ。小学校の裏山周辺は、土砂災害にあうかもしれないって。念のために周辺の住民は避難準備をしておけて……

陽子 ええ、学校どうなっちゃうの？

佐藤 わかんないですよ。

晴彦 まだ、土砂災害があるって決まったわけじゃないだろう？

父 そうだな、しかし我が家も念のためいつでも避難できるようにしておこう。

母 ええ。さあ、みんな準備して！

片付けながら避難準備をはじめる家族

母 お父さん、リュックの中身確認しておいて下さい。

父 ああ、わかった。

母 利夫君、ついでに長机も片付けちゃいましょう。避難しなくても布団しかなくちゃいけないし。

佐藤 そうですね。陽子さん、手伝って。

陽子 はいはい。……ああ！じゃあ、学校裏の花壇もダメ

になっちやうのかな。

佐藤 花壇？

陽子 ほら、お兄ちゃん。お兄ちゃんが卒業した頃、卒業記念に作った花壇。

晴彦 ああ、あの花壇か。

陽子 今なら、ひまわりかなあ、植えてるの。

晴彦 ひまわりか…

キロ ここが最後のキロ！

晴彦 えっ？

キロ どういうわけか、そのひまわりと地球の運命は密接に関係している。君はこの台風の中、ひまわりの芽を掘り起こし、庭先に持ち帰らなければならない。

晴彦 まさか…

キロ ここでの選択権は君にはない。とにかくそのひまわりの命を救うことが、地球を…いや君の家族を救うことになる。

晴彦 む、無理だよ…そんなこと。

キロ 残念ながら、やるしかない。例外はないんだ。

父 母さん、雨が強くなってきたから、もう一度晴彦の部屋を見てくるよ。

母 お願いします。

晴彦 ……

母 晴彦もほら、こんな所に突っ立ってないで手伝いな

さい。

キロ さあ、地球を救うんだ、晴彦！（鞆からおもちやくま手を差し出す）

晴彦 ……地球を…僕が…

母 晴彦？

晴彦 ……母さん、カップ出して。

母 いいけど、どうするの？避難は指示があつてからだからそんなに慌てなくても…

晴彦 ……僕ちよつと行ってくる。

母 行ってくるってどこに…

晴彦 小学校。

母 小学校って、ちよつと、何言ってるの晴彦？

晴彦 ……行かなくちゃ、大変なことになるんだ！

キロからくま手を受け取り、飛び出す晴彦

母 あっ、晴彦！

佐藤 あれ、お兄さんどこに行くんですか？

母 お父さん、お父さん！晴彦が、晴彦が！

陽子 ねえ、どうしたの？お兄ちゃん外に出たけど？

父 どうしたんだ、母さん。

母 大変なの、晴彦が、晴彦が…

父 落ち着くんだ母さん。

陽子 何があつたの？

母 ……晴彦が、小学校に行くつて！

みんな えっ！

雷鳴

暗転

#暴風の中で

オルゴール（赤ちゃん用）の音

サスの中で、土を掘っている晴彦

晴彦 （幼少期の回想）ねえ、お父さん花は、この種から

生まれるの？ねえ、お父さんもうすぐ妹が生まれるね。

そしたら僕、お兄さんだね。

父 晴彦ー！どこだー！

暴風雨の音

晴彦を探す父、花壇で晴彦を見つける

ひまわりの苗を移し替える晴彦

父 晴彦、何やってるんだ。こんなところで！

晴彦 ひまわりの苗を掘りおこしてるんだよ。

父 土砂災害があるかもしれないって、言っただろう。

危ないから、ここを離れるんだ！

晴彦 ちよつと、待つてよ。ここを移し替えるまで。

父 こんなにたくさん、無理だ。とにかく離れるんだ。

晴彦 いやだ！

父 何を言ってるんだ、さあ早く。

晴彦を花壇から離そうとする父

抵抗する晴彦

晴彦 離してよ！

倒れる父と晴彦

晴彦 早くしないと、苗がダメになっちゃう…

父 何のために、こんなことをしてるんだ…

晴彦、再びひまわりを掘りおこし出す

花壇に駆け寄り寄る家族

陽子 お兄ちゃん！

母 お父さん！

佐藤 大丈夫ですか！

父 お前たち、何しに来たんだ、危ないから早く帰りな

さい。

晴彦 ひまわりが、ひまわりが…

陽子 お兄ちゃん、何やってるの！

母 晴彦！一体どうしたの？ねえ、晴彦！

佐藤 お兄さん！

父 晴彦、答えなさい。

父、晴彦に迫る

押し返す晴彦

晴彦 ……地球が、地球がダメになっちゃうって…

みんな えっ？

晴彦 このひまわりを移し替えないと…地球が…地球  
が終わっちゃうんだよ！

父 な、なに…

母 は、晴彦？

陽子 お兄ちゃん、何言ってるの？

佐藤 地球が…終わる？

晴彦 信じてもらえないかもしれないけど…、このひま

わりを移し替えないと…地球が、ダメになるんだ…  
だから…急がないと…僕が、地球を救うんだ…僕  
が、家族を救うんだ！

必死にひまわりを掘りおこす晴彦

父、静かに近づいて、手伝い出す

晴彦 ……？

父 わかったよ、晴彦。

母 ……？

陽子 お父さん！

佐藤 早く離れないと、危ないですよ！

父 一生懸命で必死な声は、ちゃんと届いた。お父さん  
は、信じるよ。

晴彦 父さん…

母 一人でするより、みんなでした方が早く済むわよ。

晴彦 母さん…

父 俺たちは、家族じゃないか。さあ、地球を救おう！

陽子 ……ぐすん……わかった！

佐藤 急ぎましょう！

晴彦 みんな、ありがとう…

みんな その時この手で救うのは、

花の命か、この地球（ほし）か。

命の大小あるけれど、

信じて選んだその道で、

叫んだ君の言霊は、

銀河も宇宙も君の目に

輝く未来も変えていく！

音楽

みんなでひまわりを掘りおこすスローモーション

掘り起こしたひとつの苗が光り輝く

それを手渡してみんながつなぐ

暗転

地球の歴史上の様々なキロが浮かび上がる

#台風一過の朝

疲れ果てて眠る、野分家

そこにキロ現れる

キロ

地球の歴史の長さに比べれば、人間なんてちっぽけな歴史しか持たない米粒みたいな生き物だ。革命、戦

争、温暖化、地球汚染……僕ね、彼らも恐竜たちみた

いにある日儚く終わるんだって、「ずっと思ってたんだよ。だからあの時の僕にはどうしてあの方が人間の

未来を救えなんて言ったのかわからなかった。でも今

なら、なんとなくそれがわかるよ。晴彦、そんな君へ

僕からとっておきのプレゼントだ。といつても岐路だ

からどつちを選んでもそれが君の運命なんだけど……

でも期待しているよ。頑張つてね、じゃあね。

キロ消える

みんな、起き出す

晴彦

……キロ？

母

うーん、みんな朝よ。

父

お、雨も止んだみたいだな。

陽子

台風一過の朝ね……ってなんであんたが一緒に寝て

るのよ。

佐藤

陽子ちゃん、もう少し寝かせて……むにやむにや

陽子

起きろ！（寝袋を投げる）

佐藤

どうした、土砂崩れか？

陽子

何寝ぼけてるのよ。もう……

佐藤

なんだ、夢か……

母

ふふふ

父　でも、よかったな、土砂災害なくて。

母　そうね、ひまわりも無事全部移し替えられたし。

陽子　小学校も被害がなくてよかったわ。

父　そうだな。

晴彦　ひまわり咲くかな？

佐藤　苗が大きかったからなあ…無理かも…

母　きつと、咲くわよ。

父　ああ、きつと咲く。

陽子　そうね。

佐藤　そうだな、きつと咲きますね。

窓の外を眺めるみんな

母　あーっ、こんな時間。ほら、陽子、佐藤君、学校遅

刻しちゃうわよ。

佐藤　えーっ？学校あるんですか？

母　だって、プリントに台風が過ぎたら、学校は通常通りだって書いてあったわよ。

陽子　ああ、本当だ！

佐藤　げげ、そうなんですな。

母　すぐ、朝ご飯準備するからね。

陽子　ああ、もういいよ。コンビニで何か買うから。

佐藤　僕も、一度家に寄ってから行きますから、大丈夫で

す。

母　そう？あ、お父さんも、急いで下さいね。

父　ああ、僕はゆっくりでいいんだ。

母　そうですか、じゃあ、一緒にみんなの寝袋を片付けて下さいね。

父　ああ、わかった。

佐藤　じゃあ、陽子さん、また学校で。

陽子　あ、うん。ねえ、お母さん、髪の毛知らない？

母　ええ？洗面台にない？

晴彦　あの、僕も学校行くよ。

みんな　ええ！

晴彦　まあ、なんとなくだけど、行ってみようかなって…

母　晴彦…（抱きしめる）（涙）

晴彦　ちよつと、母さん。恥ずかしいよ。

母　お母さん嬉しくて（涙）

晴彦　痛いよ母さん。離してよ。

母　ごめんなさい。（涙）

父　そうか、学校行くか、うん。うん。

陽子　お兄ちゃん、一緒に行こう。

晴彦　ああ、うん。

佐藤　僕も一緒に行きますよ。

晴彦 あ、ありがとう。

母 そうとわかったら、やっぱりお弁当ぐらいは持って行ってよね。なんたって晴彦の復活の日なんだから。

晴彦 いいよ、そんな大げさな

陽子 そうよ、今から作ってたら間に合わないでしょ。

母 大丈夫、缶詰詰めるだけだから（笑）

陽子 なるほど、グッドアイデア！

母 だから、ね。

晴彦 わかったよ。

母 佐藤君のも詰めて、陽子に持たせるからね。

佐藤 ありがとうございます。じゃあ、またあとで。

佐藤去る

それぞれ、支度を始める

母 さ、みんな支度を急いでね。お父さんも早く片付け

てくださいよ。

父 ああ、よいしょっと。このタオルケットは？

母 それは、寝室の押入れです。

片付けをする父

晴彦 母さん、制服の襟章は？

母 たしか、机の引き出しにしまっているわよ。

晴彦 わかった。

陽子 わたしの髪留めは？

母 洗面所じゃないの？

陽子 ないんだけど？

母 ちゃんと整理してないからそうなるのよ。

陽子 もう、別のでもいいか。

父、リビングに戻り

父 あれ、母さん。押し入れから宝くじが出てきたんだ28

けど…

母 ああ、それそんな所にあっただんだ…随分前に買ってどこに行ったのかなあって、探してたのよね。あと

で、番号見といてくださいね。

晴彦 母さん、襟章ないんだけど？

父 ふーん。わかったよ。

母 ええ？ちゃんと探したの？

陽子 お兄ちゃん、急いでよ。

晴彦 ちよっと、待ってよ。

にぎやかに朝の支度をしている家族

キロがリビングにヒマワリを手に現れる

父通りすがりに会釈をするが、一体何に会釈をしたのか

不思議な様子

空は、晴れ渡り

家族の心には、大きなひまわりが咲いていた

キロ、客席にカーテンコールのように一札

音楽

幕

